

## 呼称選択からみた大学生の友人関係と性格特性

宮城, 実佳  
九州大学大学院人間環境学府

黒木, 俊秀  
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/2228898>

---

出版情報 : 九州大学心理学研究. 19, pp.9-14, 2018-03-22. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

# 呼称選択からみた大学生の友人関係と性格特性

宮城 実佳 九州大学大学院人間環境学府  
黒木 俊秀 九州大学大学院人間環境学研究院

## Personality and friendship in forms of address of university students

Mika Miyagi (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu University*)

Toshihide Kuroki (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The purpose of this study is to examine the relationship between personality and the forms of address through a survey on 284 university students. NEO-FFI was used in the survey for analyzing five different personality traits. However, only Extraversion, Openness and Agreeableness were used in this study. Moreover, six scenarios were established and participants were asked to select the forms of address based on each situation. Besides, the friend established in scenarios is defined as “acquaintance” which means he is somewhere between a close friend and a stranger. However, Extraversion and Openness were not associated with forms of address in all situations. The results show that the high Agreeableness group chose to use a nickname rather than a honorific title for a female friend in a group after a year of knowing each other. It is suggested that the high Agreeableness participants selected the forms of address for female friends in order to be friendlier and align themselves with the opinions of those around.

**Key Words:** Forms of address, Personality, Friendship

## I 問題と目的

### 1. 対人関係における呼称と心理的距離

普段の私たちは、場面や相手との関係性に応じてふさわしい呼称を選択している。日本語の呼称の特徴を指摘した鈴木 (1973) によると、話し手が自分自身に言及することば (自称詞) と、話しの手相手に言及することば (対称詞) には規則がある。例えば、上下関係を伴わない友人関係で用いられる呼称には社会規範のような制限はなく、「姓+さん」「姓+くん・ちゃん」「名+さん」「名+くん・ちゃん」「愛称」「呼び捨て」などの多くの呼称から選択して使うことができる。したがって、社会的に同位置にいる友人に対する呼び手の呼称選択の自由度は、上下関係における呼称選択よりも大きいと考えられる。

上下関係のない友人への呼称選択には、呼び手の友人に対する心理的距離が関係していると考えられる。藤井 (2001) によると、心理的距離とは社会的接触により規定される物理的な対人距離とは異なり、親密度や依存度などによって規定される。自己が他者との間に認識する距離をさす。友人に対する呼称を手がかりに、学級集団内における児童の人間関係と心理的距離の関連を調べた研究は主に小学生を対象に多くなされている。三島 (2003) の研究では、女子児童の場合はインフォーマルな集団の仲間と比べ、仲間以外の児童から「さん付け」で呼ばれることが多く、また仲間からは「呼び捨て」や「あだ名」で呼ばれることが多いことが分かった。さらに、「くん

付け」で呼ばれる男子と「さん付け」で呼ばれる女子は、他の児童から心理的距離を置かれる傾向がみられることが明らかになっている (中條・滝浪, 1989)。このように、友人関係において相手への心理的距離は呼称選択を規定する一因になっていると考えられる。

### 2. 青年期の友人関係

青年期になると、児童期までの家庭を中心とした人間関係からより広い人間関係を構築していく。人間関係の中でも友人関係は、悩みを打ち明け、相談に乗ってくれる友人がいることで、精神的安定を図ることができるため重要である (落合・伊藤・齊藤, 2002)。初等中等教育では、学級が学校生活の主要な場になるため、友人関係を築く以前に学級という枠が友人を作る環境として強固に構築されている。一方、大学においては学級ほど強く構築された枠が予め設定されていないため、より広い関係性のなかで友人関係が築かれると考えられる。加えて、児童期から青年期にかけては対人関係に関する社会規範を段階的に習得する時期である。児童期においては上下関係を気にせずに相手に話しかけることは社会的に容認されやすいが、発達に伴い相手と自分の社会的関係性に依った接し方を求められるようになる。よって、大学生においては、社会規範に則ったフォーマルな付き合い方と社会規範に従う必要のないインフォーマルな付き合い方の両方を身に付けてゆく。大学生においてはインフォーマルとフォーマルといった友人関係の幅が広がるため、

個人の対人関係の特徴がより大きく影響し、呼称に心理的距離が強く表れるのではないだろうか。大学入学前の教育課程における呼称のされ方を用いた学級集団内での児童・生徒の友人関係を把握することを目的とした研究は多くされているが、青年期の大学生を対象とした呼称と友人関係の関連を調べた研究はあまりされていない。

### 3. 呼称選択における二者関係と第三者の存在

坂本・高橋（2009）は友人関係における心理的距離のズレと疎外感の関連を調査し、友人への心理的距離と友人からの心理的距離が一致している場合に疎外感が低くなることを明らかにした。また、友人との心理的距離に満足している青年より、もっと近づきたいと希求している青年は孤独感を感じやすいことも指摘されている（坂本・高橋，2009）。これより、大学生は友人からの心理的距離を敏感に感じ取りつつ友人関係を構築していることが推察される。よって呼称選択の際には、友人への心理的距離を表す呼称を選択したいが、相手から拒否されるのではないかといった二者関係における不安を持つことが予想されるだろう。

また、青年期の友人関係において同調性を取り上げた研究は多くなされている。石本ら（2009）は女子高校生において心理的距離の遠さと同調性の高さの両方の特徴を持つ群は心理的適応と学校適応が良くないことを指摘した。呼称は第三者が二者関係を推測できるツールとして機能し、呼称選択においても集団に同調して自己の心理的距離を表さない呼称を選択する場合があることが予想される。

自己から友人への心理的距離と友人から自己への心理的距離とのズレを感じることからくる孤独感や、自己の心理的距離ではなく集団に同調することからくる不適応感は、大学生にとって悩ましい問題であるだろう。相手への心理的距離は呼称選択を規定する一因になっていると考えられることから、呼称選択を通して大学生の抱く心理的距離のズレや集団への同調について明らかにすることができるのではないかと考えられる。

### 4. 呼称の特徴

中條・滝浪（1989）は6校の小学校で呼称の調査とソシオメトリック・テストを行い、呼称と学級内の人間関係との関連を調査した。6校を比較した結果、小学校の位置する地域が都市型か農村型かによって呼称形式が異なり、農村型ではあだ名、呼び捨てが目立った。これより、呼称の持つ心理的距離の尺度が地域ごとで異なり、呼称選択が対人関係だけではない地域性といった要素も影響する可能性が考えられる。よって本研究では大学の位置する地域をフェイスシートで大学と出身地の回答を求めることとする。

### 5. 他者集団の分類

他者集団を分類する際の一つの基準として親密度があげられる。他者集団のカテゴリについて内沼（1997）は、親密な他者からなる「親密集団」と見知らぬ人である「無関係集団」、その両者の間に位置する「中間集団」に分類し、「中間集団」において心理的距離のとり方の困惑度が高まると述べている。大学という場においては、知人ではあるが親密な友人とまでは言えない中間集団の友人と関わりを持つ機会が多くなる。したがって中間集団に属する友人への接し方や距離のとり方に困惑を覚える学生は少なくないと考えられる。そこで、本研究では中間集団に属する友人への呼称選択に焦点を当てることとする。本研究では場面想定法を用い、全く関係のない他人ではないが、とても親しい友人とも言えない関係性の同学年の友人を中間集団に位置づける。大学生において内沼（1997）が指摘した「中間集団」と関係性を継続していく必要性が高い場所としてサークルが挙げられる。また、見知らぬ人と出会った初対面時から一年経った時期に中間集団の友人が存在することはサークル内で生じると考えられる。よって大学生が中間集団への呼称選択をイメージしやすくなるようにサークル場面を設定した。

### 6. 友人関係と性格特性

友人との付き合い方に影響するものの一つに性格特性がある。谷岡・田頭（2011）は、青年期における友人との付き合い方尺度（落合・佐藤，1996）を用いて、性格特性の中でも Big Five を用いてそれが友人とのつきあい方に及ぼす影響について検討した。その結果、友人との付き合い方が「防衛的」「自己自信」、「同調的」、「全方向」、「被愛願望」、「積極的相互理解」の6因子に分類された。また、性格特性が友人との付き合い方に影響を及ぼすという予測を基に因果モデルを立て共分散構造分析を行った結果、性格特性が友人との付き合い方に正の影響を及ぼし、性格特性として調和性、外向性、開放性の高い人が「被愛願望的」、「全方向的」、「同調的」な付き合い方を友人とする傾向が強いことが示された。

性格特性が友人との付き合い方において防衛的に心理的距離を遠くしたり、誰に対しても心理的距離を近く接したりすることに影響するのであれば、呼称選択も友人との付き合い方の一つの表現であるため、性格特性との関連があると考えられる。

### 7. 本研究の目的

以上のように、友人関係の構築や維持に性格特性が大きく影響し（谷岡・田頭，2011；杉浦，2000）。また、呼称と心理的距離、対人関係との関連も明らかになっている（中條・滝浪，1989）。しかし、これまでの呼称に関する研究は、研究の対象者がどのような呼称のされ方

を調べるとどまっておき、個人が呼称を選択することについては研究がなされていない。そこで、本研究では大学生を対象に、呼称の選択と性格特性との関連について検討することを目的とする。

なお、Big Five 特性の中でも、谷岡・田頭 (2011) に基づいて友人との付き合い方に影響すると考えられる調和性、外向性、開放性の三因子に限定して扱う。また、友人関係の中でも呼称が安定的ではないとされる「中間集団」に属する友人を想定した3つの場面を用意した。さらに、呼称の種類として「さん付け」、「くん・ちゃん付け」、「あだ名・呼び捨て」の3パターンを設定し、「さん付け」、「くん・ちゃん付け」、「あだ名・呼び捨て」の順で心理的距離が遠い呼称と定義した。

ニックネームに対する感情に関する田所・松田 (2014) の研究から、あだ名を持つ人は大学内の同学年、友人からあだ名で呼ばれることが多いと予想されるため、本研究においてはあだ名あり場面とあだ名なし場面に分けることにした。

## II 方法

### 1. 調査協力者

大学生 284 名 (男性: 107 名, 女性: 177 名) が質問紙に回答した。平均年齢は 20.51 歳 (SD = 1.85) であった。

### 2. 質問紙の構成

- 1) フェイスシート: 調査協力者の基本的属性である性別・年齢・出身地・大学名・学年について回答を求めた。
- 2) 場面想定: 場面を想定させ、その場面において調査協力者がどのような呼称をするのかについて回答を求めた。

想定させた場面は、次の3通りである。

①A は同学年で、男性です。大学1年生のあなたとA はサークルに入ったばかりで、互いに名前は知っていますが、まだ話したことはありません。その後、サークルの集まりがあった時、隣同士になり初めて雑談する機会がありました。

②あなたがA と最初に知り合ってから一年が経ちました。A はサークル内で一般にあだ名で呼ばれています。A はあなたにとって、全く関係のない他人ではあり

ませんが、とても親しい友人とも言えません。普段の大学生活で一緒に行動することはありませんが、サークル活動や飲み会などでは雑談するような間柄です。

③あなたがA と最初に知り合ってから一年が経ちました。A はサークル内で一般に呼ばれるあだ名はありません。A はあなたにとって、全く関係のない他人ではありませんが、とても親しい友人とも言えません。普段の大学生活で一緒に行動することはありませんが、サークル活動や飲み会などでは雑談するような間柄です。

想定させた人物が女性のパターンも用意し、合計6種類の場面が設定された。

調査協力者は場面の文章を読んだ後、「あなたはA をなんと呼びますか?」の質問に対して「(a)姓+さん, (b)姓+ちゃん, (c)姓+くん, (d)姓・呼び捨て, (e)名+さん, (f)名+ちゃん, (g)名+くん, (h)名・呼び捨て, (i)あだ名(ニックネーム), (j)その他」の選択肢から回答をさせた。また、「そう呼ぶのはなぜですか?理由をお書き下さい」の質問も設けた。

3) NEO-FFI 人格検査: NEO-PI-R 人格検査 (下仲・中里・権藤・高山, 1998) の短縮版である NEO-FFI 人格検査を用いて性格特性を測定した。NEO-FFI 人格検査は、「神経症傾向」、「外向性」、「開放性」、「調和性」、「誠実性」の5因子から構成されている。質問は各因子につき12問あり、「(1)非常にそうだ〜(5)全くそうでない」の5件法により実施された。

なお、この調査は九州大学大学院人間環境学研究院臨床心理学講座研究倫理委員会の承認を得て行われた。

## III 結果

### 1. 性別・場面毎の呼称選択

呼称を3群に分け、「姓+さん」「名+さん」をさん群、「姓+ちゃん」「姓+くん」「名+ちゃん」「名+くん」をくん・ちゃん群、「姓・呼び捨て」「名・呼び捨て」「あだ名(ニックネーム)」を呼び捨て・あだ名群とした。また、想定した6場面について i) 対男性初対面場面, ii) 対男性一年後あだ名あり場面, iii) 対男性一年後あだ名なし場面, iv) 対女性初対面場面, v) 対女性一年後あだ名あり場面, vi) 対女性一年後あだ名なし場面と名づけた。場面毎の呼称選択の記述統計を Table 1 にまとめた。

Table 1  
場面毎の呼称選択の記述統計

		対男性					
		i) 初対面		ii) 1年後あだ名有		iii) 1年後あだ名無	
		さん群	くん・ちゃん群	呼捨・あだ名群	さん群	くん・ちゃん群	呼捨・あだ名群
男性		26	53	28	5	10	92
女性		29	123	25	7	34	136
		対女性					
		iv) 初対面		v) 1年後あだ名有		vi) 1年後あだ名無	
		さん群	くん・ちゃん群	呼捨・あだ名群	さん群	くん・ちゃん群	呼捨・あだ名群
男性		84	12	11	34	4	69
女性		42	107	28	6	22	149

## 2. 呼称と性格特性の関連

呼称を3群に分け、「姓+さん」「名+さん」をさん群、「姓+ちゃん」「姓+くん」「名+ちゃん」「名+くん」をくん・ちゃん群、「姓・呼び捨て」「名・呼び捨て」「あだ名(ニックネーム)」を呼び捨て・あだ名群とした。性別と呼称を独立変数、性格特性のそれぞれ3因子(外向性、開放性、調和性)を従属変数とする2×3の2要因被験者間分散分析を行った。ここでは中間集団に相当する1年後の場面の結果について報告する。

## 1) 対男性1年後あだ名あり場面

外向性、開放性、または調和性のいずれの性格特性に関しても、性別、呼称の主効果は見られなかった(Table 2)。

## 2) 対男性1年後あだ名なし場面

外向性、または開放性に関して、性別、呼称の主効果は見られなかった。調和性に関して、性別、呼称の主効果は見られなかったが( $F(1,278) = .66, n.s.$ ;  $F(2,278) = .48, n.s.$ )、交互作用において有意差が見られた( $F(2,278) = 3.45, p < .05$ )。単純主効果検定の結果、くん・ちゃん群における性別の主効果が有意であり( $F(1,278) = 9.55, p < .01$ )、Bonferroni法による多重比較をしたところ(以

下、単純主効果における多重比較は全てBonferroni法を用いた)、くん・ちゃん群において女性は男性よりも有意に調和性が高かった( $p < .01$ ) (Table 3)。

## 3) 対女性1年後あだ名あり場面

外向性に関して、性別、呼称の主効果は見られなかった( $F(1,278) = .01, n.s.$ ;  $F(2,278) = .12, n.s.$ )。開放性に関して、性別の主効果が見られ( $F(1,278) = 7.90, p < .01$ )、女性が男性より開放性が高かった。呼称の主効果は見られなかった( $F(2,278) = .49, n.s.$ )。交互作用においては有意であり( $F(2,278) = 4.35, p < .05$ )、単純主効果の結果、くん・ちゃん群における性別の単純主効果が有意であり( $F(1,278) = 8.18, p < .01$ )、多重比較したところ、女性は男性よりも有意に開放性が高かった( $p < .05$ )。一方、女性における呼称の単純主効果が有意であり( $F(2,278) = 3.23, p < .05$ )、多重比較をしたところ、女性においてくん・ちゃん群は呼び捨て・あだ名群よりも有意に得点が高かった( $p < .05$ )。調和性に関して、性別の主効果は見られなかった( $F(1,278) = 1.21, n.s.$ )。呼称の主効果は5%水準で有意となり( $F(2,278) = 3.14, p < .05$ )、呼び捨て・あだ名群はさん群より調和性が高かった( $p < .05$ ) (Table 4)。

Table 2

各変数の平均値(標準偏差)と2要因分散分析結果(対男性あだ名あり)

	さん群		くん・ちゃん群		呼び捨て・あだ名群		F値		
	男性 (n=5)	女性 (n=7)	男性 (n=10)	女性 (n=34)	男性 (n=92)	女性 (n=136)	性別	呼称	交互作用
外向性	1.55(0.60)	1.96(0.37)	1.92(0.47)	4.74(16.41)	1.97(0.44)	2.10(0.48)	0.72	0.74	0.77
開放性	2.28(0.57)	2.54(0.35)	2.50(0.38)	2.41(0.43)	2.36(0.44)	2.42(0.35)	0.65	0.42	0.89
調和性	2.33(0.37)	2.37(0.28)	2.28(0.32)	2.42(0.42)	2.39(0.45)	2.52(0.46)	1.00	0.94	0.07

注: \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

Table 3

各変数の平均値(標準偏差)と2要因分散分析結果(対男性あだ名なし)

	さん群		くん・ちゃん群		呼び捨て・あだ名群		F値		
	男性 (n=10)	女性 (n=12)	男性 (n=32)	女性 (n=126)	男性 (n=65)	女性 (n=39)	性別	呼称	交互作用
外向性	1.67(0.60)	1.89(0.32)	1.87(0.49)	2.83(8.52)	2.03(0.39)	2.08(0.49)	0.18	0.12	0.16
開放性	2.32(0.52)	2.60(0.32)	2.45(0.47)	2.41(0.37)	2.33(0.40)	2.38(0.37)	2.26	1.14	1.49
調和性	2.34(0.35)	2.29(0.37)	2.28(0.45)	2.55(0.44)	2.42(0.44)	2.38(0.46)	0.63	0.48	3.45*

注: \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

Table 4

各変数の平均値(標準偏差)と2要因分散分析結果(対女性あだ名あり)

	さん群		くん・ちゃん群		呼び捨て・あだ名群		F値		
	男性 (n=34)	女性 (n=27)	男性 (n=4)	女性 (n=22)	男性 (n=69)	女性 (n=149)	性別	呼称	交互作用
外向性	1.78(0.48)	1.67(0.26)	2.31(0.32)	2.08(0.61)	2.00(0.42)	2.71(7.84)	0.01	0.12	0.08
開放性	2.34(0.44)	2.53(0.27)	2.00(0.12)	2.61(0.35)	2.40(0.44)	2.39(0.37)	7.89**	0.47	4.35*
調和性	2.29(0.37)	2.21(0.43)	2.13(0.44)	2.47(0.46)	2.43(0.46)	2.51(0.45)	1.21	3.14*	0.93

注: \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

## 4) 対女性一年後あだ名なし場面

外向性に関して、性別、呼称の主効果は見られなかった ( $F(1,278) = .11, n.s.$ ;  $F(2,278) = .22, n.s.$ )。開放性に関して、性別の主効果は見られ ( $F(1,278) = 5.11, p < .05$ )、男性より女性の開放性が高かった。呼称の主効果は見られなかった ( $F(2,278) = 2.60, n.s.$ )。調和性に関して、性別、呼称の主効果は見られなかった ( $F(1,278) = 3.87, n.s.$ ;  $F(2,278) = .24, n.s.$ )。交互作用においては有意差がでた ( $F(2,278) = 4.50, p < .05$ )。単純主効果検定の結果、くんちゃん群における性別の主効果が有意であり ( $F(1,278) = 11.70, p < .01$ )、くんちゃん群において女性は男性よりも有意に調和性が高かった。一方、女性における呼称の単純主効果が有意であり ( $F(2,278) = 3.26, p < .05$ )、くんちゃん群は呼び捨て・あだ名群よりも有意に得点が高かった ( $p < .05$ ) (Table 5)。

## IV 考 察

## 1. 呼称選択と調和性の関連

対女性一年後あだ名あり場面では、調和性において、2要因分散分析に呼称との関連が見られ、呼び捨て・あだ名群はさん群よりも調和性が高い結果となった。以上の結果について、第一に、本研究における群の定義により、調和性が高い人は心理的距離が近いために呼び捨て・あだ名を選択したと考えられる。どんな友達とも仲良くしたいといった友人との付き合い方をする人には外向性、調和性、開放性の影響が見られたことから(谷岡・田頭, 2011)、中間集団の友人に対してもあだ名で呼ぶことで、親密度を高めようとしたと考えられる。第二に、集団内で流通しているあだ名を持つ人に対してさん付けで呼ぶことは、相手に対して自分が心理的距離を遠く感じていることを示すことになり、かつその二者関係を集団内の第三者へも示すことになると考えられる。そのため、誰にでも好意をもって接しようとし、人と協力し合う方が好きな調和性の高い人は、同じ集団に属する相手に対して距離を取っていると思われないうに、また所属集団に対して自身が集団に馴染んでいないと思われないうに、あだ名あり場面においてはあだ名を選択したと推察される。

対女性一年後あだ名なし場面では調和性において交互作用がみられ、女性においてくん・ちゃん群が呼び捨て・あだ名群より調和性が高かった。三島(2003)は、女子児童はインフォーマル集団内の児童をあだ名や呼び捨てする反面、インフォーマル集団外の児童をさん付けすると報告している。すなわち、女子児童は相手が自分が所属するインフォーマル集団内では心理的距離の近い呼称を用いることが示唆された。本研究で想定した中間集団(内沼, 1997)はインフォーマル集団ではないため、女子大学生も一般に心理的距離の近いあだ名や呼び捨てを選択することはないと考えられる。よって女子大学生の同性の中間集団の友人に対する呼称選択は、調和性の高い人ほど周囲と同調するため、心理的距離が近すぎる呼び捨て・あだ名よりもちゃん付けが多いと考えられる。

対男性一年後あだ名あり場面、対男性一年後あだ名なし場面において、呼称と調和性に関連はみられなかった。三島(2003)によれば、女子児童のみがインフォーマル集団の内と外で呼称を変化させていることから、男子よりも女子が集団外の児童に対して排他性が高い可能性がある。したがって、大学生においても男子学生が形成するインフォーマル集団の排他性は低いことが予想され、中間集団の同性の友人に対する呼称選択の幅がより広く、周囲の呼び方に同調・配慮する必要性が少ないと考えられる。

## 2. 呼称選択と外向性の関連

本研究では、すべての場面で外向性と呼称との関連が見られなかった。呼ぶ側と呼ばれる側の二者関係を表し、被呼称者が呼称によって呼称者の被呼称者に対する心理的距離を測ることができる点が呼称の特徴であると考えられる。加えて、第三者または集団が呼称によってその二者関係を推測できることも特徴の一つだろう。呼称選択に際して、被呼称者・第三者からどう思われるかといった他者への配慮や同調といった特性が関係していると考えられる。

## 3. 呼称選択と開放性の関連

対女性一年後あだ名あり場面では開放性において交互作用が見られ、女性においてくん・ちゃん群は呼び捨て

Table 5  
各変数の平均値(標準偏差)と2要因分散分析結果(対女性あだ名なし)

	さん群		くん・ちゃん群		呼び捨て・あだ名群		F 値	呼称	交互作用
	男性 (n=63)	女性 (n=18)	男性 (n=15)	女性 (n=110)	男性 (n=29)	女性 (n=49)			
外向性	1.91(0.49)	1.78(0.41)	2.07(0.42)	2.99(9.12)	1.95(0.39)	2.03(0.43)	0.11	0.22	0.13
開放性	2.40(0.44)	2.56(0.28)	2.23(0.52)	2.39(0.40)	2.36(0.38)	2.44(0.31)	5.11*	2.59	0.23
調和性	2.41(0.42)	2.42(0.56)	2.15(0.50)	2.56(0.44)	2.41(0.42)	2.38(0.40)	3.87	0.24	4.49*

注: \* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

て・あだ名群より開放性が高かった。鈴木・木野 (2008) は他者指向性—自己指向性の観点から共感性を測定する多次元共感性尺度を作成し、5 因子性格検査 (和田, 1996) との相関から妥当性を検討した。その結果、多次元共感性尺度の一つである「被影響性」因子と「開放性」に負の相関がみられた。「被影響性」因子とは、他者の心理状態に対する素質的な巻き込まれやすさを測定するものであり、他者からの影響の受けやすさを示したものである。よって、開放性の高い人は被影響性が低く、周囲からの影響を受けにくいと推察される。これより、開放性の高い女子大学生は、周囲に流されにくく、自己の判断によってちゃん付けを選択したと考えられる。

#### 4. まとめ

本研究では呼称選択と調和性の関連がいくつかの場面で見られた。対女性一年後あだ名あり場面において関連が見られたことから、呼称選択には集団内で対象が特定の呼称で呼ばれているかいないかという点が重要であると考えられる。対象への心理的距離の遠近に関わらず、周囲が選択した呼称に合わせることで集団の輪を乱さずに適応することができるのではないだろうか。一方で対男性一年後あだ名あり場面においては呼称選択と調和性の関連は見られなかった。男子大学生間のインフォーマル集団は女子大学生よりも排他性が低いため、周囲に合わせるといった調和性が及ぼす影響は弱く、自己の基準に従い呼称選択をしやすかったといった性差がある可能性が示された。

## V 今後の課題

最後に、本研究の限界点を挙げておく。呼称選択は同性間と異性間で度数に偏りがあり、同学年の友人関係では呼びかける対象の性別によって呼称選択規範が存在していることが推察される。本研究において呼称選択と調和性の関連が見られたことから、集団内の呼称選択規範に多くの人が影響を受けている可能性があるだろう。よって、友人間での呼称選択規範を前提とした場面想定を設定する必要があると考えられる。次に、呼称の分類方法が適切であったのか課題が残った。本研究においては「姓+さん」「名+さん」をさん群、「姓+ちゃん」「姓+くん」「名+ちゃん」「名+くん」をくん・ちゃん群、「姓・呼び捨て」「名・呼び捨て」「あだ名 (ニックネーム)」を呼び捨て・あだ名群と分類し、実際にはあだ名がある場面とない場面における「あだ名・呼び捨て」群の性質が異なることが予想できるが、本研究においては場面におけるあだ名・呼び捨て群の内訳を考慮することができなかったため、この点を明らかにする研究が求められる。

## 引用文献

- 藤井恭子 (2001). 大学生の友人関係における心理的距離のとり方. 茨城県立医療大学紀要, **6**, 69-78.
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長 然・則定百合子・日湯淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連. 発達心理学研究, **20** (2), 125-133.
- 三島浩路 (2003). 学級内における児童の呼ばれ方と児童相互の関係に関する研究. 教育心理学研究, **51**, 121-129.
- 中條 修・滝浪常雄 (1989). 呼称に見られる対人関係の認識. 静岡大学教育学部研究報告人文・社会科学篇, **40**, 1-16.
- 落合良行・伊藤裕子・齊藤誠一 (2002). 青年の心理学 [改訂版]. 有斐閣.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化. 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 坂本 安・高橋靖恵 (2009). 友人関係における心理的距離のズレと疎外感の関連. 青年心理学研究, **21**, 69-81.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑 (1998). 日本版 NEO-PI-R の作成とその因子的妥当性の検討. 性格心理学研究, **6**, 138-147.
- 鈴木考夫 (1973). ことばと文化. 岩波新書.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—. 教育心理学研究, **56**, 487-497.
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係. 教育心理学研究, **48**, 352-360.
- 谷岡 瞳・田頭穂積 (2011). 女子大学生の対人ストレスコーピングおよび友人との付き合い方に及ぼす性格特性の影響. 広島文教女子大学心理臨床研究, **2**, 20-24.
- 田所将之・松田 勇 (2014). 優秀論文 ニックネームに対する感情についての研究—命名者・呼称者・理由・由来の違いによる評価—. 宇都宮共和大学都市経済研究年報, **14**, 136-153.
- 内沼幸雄 (1997). 対人恐怖の心理—羞恥と日本人. 講談社学術文庫.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた BIG FIVE 尺度の作成. 心理学研究, **67**, 61-67.